高校の部　最優秀賞

いじめ

島根県立大田高等学校　１年
松浦　里沙（まつうら　りさ）

「いじめ」それは、学生である私達にとってもっとも身近な人権侵害のひとつです。そして、人権とは、人が生まれながらに持つ、国家権力によっても侵されない基本的な諸権利であり、もっとも大切にしなければならないものです。「いじめ」はその大切な「人権」を侵害する行為です。それにもかかわらず、新聞やテレビで「いじめ」はよく取り上げられます。私はそれらの話題を聞くたびに「かわいそうだな」「本当にいけないことだな」と思っていました。今考えてみるとこのときの私は「でも、いじめは自分に関係ない」とどこか他人事のように考えていたと思います。

このように、私が「いじめ」をどこか他人事のように考えていた中学生のときのことです。二年生になり、学校生活にも慣れた頃、何が原因かわかりませんが、同級生から嫌がらせを受けるようになりました。私には同じ部活動に親友がいたのですが、ある同級生が私のその親友の仲を知りながら、その親友に私の悪口

や嘘を言うようになったのです。親友の持っているシャーペンについて、私が文句をつけているとか、その親友より私のほうが上手に部活動ができると私が自慢しているとか、そんな嘘をその同級生は私の親友についていました。

嘘を聞いた親友はその嘘を信じてひどく怒り、私達の関係は崩れていったのです。親友とは毎日一緒に登下校していたのですが、そのことがあってからはお互い無言で学校へ行く日が続きました。私は同級生が親友に嘘をついているとは知らなかったので、どうして親友が私に怒っているのか尋ねてみました。同級生はひどく傷ついていたのか、怒りながら答えてくれました。そこで初めて私は状況を知ったのです。

それからしばらく、私は周りの人誰もかもが信じられなくなる人間不信になりました。そのときはとても苦しくてすごく辛かったです。周りからみればそこまで大きくて重たいいじめには見えないかもしれませんが、私にとってはとても辛く傷つけられたいじめでした。そしてこのいじめは私だけでなく、事実を知った私の親友も傷つけていました。

いじめをした同級生は私の親友まで傷つけたことは自覚してなかったと思います。軽い気持ちだったのだと思います。だから平気で嘘をつけたのでしょう。

この経験をしてから、悪口を言われている、いじめを受けている側はとても苦しくて辛いことなんだと実感を持ってわかるよ

うになりました。逆に悪口を言っている、いじめをしている方は相手や周りの人を傷つけている自覚がないのだなということもわかりようになりました。自覚がないからこそ、陰で悪口を言ったり、平気で嘘の噂を流したりできるのだと思います。悪口を言うことも立派ないじめですし、悪口は思っている以上に多くの人を傷つけています。そしていじめというものはエスカレートしていくと人の人生を簡単に変えてしまうものでもあると思います。

　だから自分とは違うから、気に食わないなどといった理由で、軽い気持ちでいじめにあたる行為をしてはならないのです。人はみな弱い生き物であり、強くて平等で勇敢なアニメのヒーローのような人はいないのです。

　そういう私も知らないうちに沢山の人を傷つけていたのかもしれません。けれど、これからは自分の経験を活かして周囲のことを考えた発言や行動ができる人に成長したいと考えています。そして、できることなら周りからいじめをなくしたいです。いつも一緒にいる友達はよく別の友達の悪口を言います。でもまだ私はそれを聞くことだけしかできていません。いつかはその友達に、「もし自分が悪口を言われたらどんな気持ちになる？」とちゃんと言えるような人に私はなりたいです。

　この作文を書くことを通して、自分の気持ちが整理され、これからどうしたいのかというしっかりとした気持ちも生まれたと

感じています。いじめは相手だけでなく、その周りの人や、もしかしたら自分自身も傷つける行為だと思います。これからは今以上に人の気持ちを大切に考えていきたいと思います。